

「落語と私」 その九

三代目 橘ノ百圓

九、蛙茶番(舞台番)(素人芝居)

この噺も圓師匠の得意根多で、良く高座に懸けてました。私も社会人になって数年経ってましたから、誰はばかる事なく演れるのですが、なかなか難しい噺です。先ず、この噺に出て来る芝居「天竺徳兵衛」を知らなくては、噺に深みが出ませんので、先代猿之助の「天竺徳兵衛韓噺」を観に行きました。寸法の大きな物語で、この噺に出て来る、忍術譲り場もシッカリ観ましたが、直ぐに出来るテェ訳もなく、苦勞した噺です。

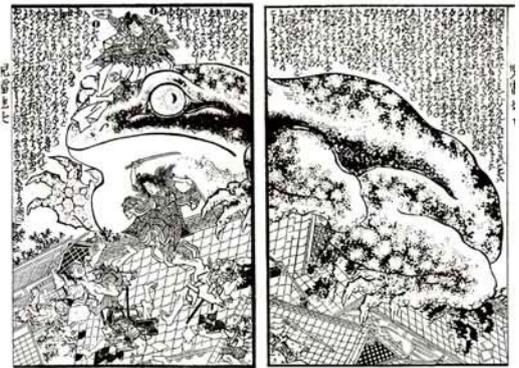
「あらずじ」

いつ頃まで続いていたかは分かりませんが、昔江戸(東京)の戎講の日に、大店で素人芝居を演じた様で、素人の方々ですから、誰しも、良い役を演りたいもんで、毎回役揉め、そこで今回は籤で決めようと、皆さん納得の上、役が決まり芝居の当日、それでも役揉めの為、近江屋の若旦那が来ない、籤の責任者、番頭に訊くと、若旦那の役は、天竺徳兵衛が譲り受けた忍術を遣うと出て来る蝦蟇の役との事、当家の旦那がこの番頭に小言、「お前は、何歳になるんだ!? 籤の中に蝦蟇の役を入れとく方が間違ってますヨ、じゃあ、この役は芝居好きな小僧の定吉に演らせなさい」テな事で番頭さん、蝦蟇の役を嫌がる定吉に「縫い包みを着るから、誰が入って居るか判らないヨ」とか「お前にだけ小遣を倍にして、休みも1日多く遣るから」と宥め賺してこれは解決、次に舞台番の半次が来てない、定吉を呼びに遣るが当の半次は、旦那に舞台番を遣る様に言われたのが面白くなくて「馬鹿にしやがって、誰が行くもんか!」とご立腹、定吉も身の危険を感じて一旦お店に帰ったが、“亀の甲より歳の功”番頭さんが半次が岡惚している、小間物屋のミイ坊を出汁に、半次が鼻の下を伸ばして必ず出て来る知恵を授けて、もう一度半次の長屋へ、作戦通りに事は運び、半次も喜んで舞台番を引く受けたが、定吉に、舞台番にしては、形が地味だネと言われ「ヨシ、形は地味だが、一ヶ処だけ派手な所が有って落を取ろうテェのはどうでエ、イヤ、去年の祭に締めた緋縮緬の禪をしようと思うが、只、これが質屋に入っているから、入れ換物に、お釜でも持って行くか」と、定吉が「禪の入換物にお釜なんて、縁が在って面白いネ」と、ませた事を言って店に帰るが、又、中なか半次が来ない。番頭さんに催促されて再度長屋に来ると、見栄張の半次は、ミイ坊が来ると言うので、銭湯で体を磨いている処、定吉が迎へに来て「早くしないとミイちゃん帰っちゃうヨ」と煽られて、慌てて湯から出ると、ろくに体も拭かずに表に飛び出したのだが、散々自慢をして、番台に預かって貰った肝心な緋縮緬の禪を忘れてしまい(中略)やっとの事で、お店に駆けつけて、舞台袖の舞台番の位置に座ったが、ミイ坊が見付からないので、奴さん、尻を捲って大きな声で「サアサア、子供は騒いじゃいけネエ、静かにしろ」と、本人が一番五月蠅い始末、見物客がこれを観て「伊勢屋の旦那、あのバカ半の股座ご覧なさい、野郎あれが見せたくて騒いでるんですヨ、八町荒しテェ事は聞いてましたが、立派な物ですネ、誉めちゃいましょう、ヨウヨウ舞台番、ご立派、日本一!」さて、舞

台では、忍術を譲り受けた天竺徳兵衛が、蝦蟇の妖術^{つか}を遣うが、肝心の蝦蟇が出て来ない。番頭さんが定吉に「サアお前の出番だ、早く出る」と後から押したが、定吉は「出られません、出られません」「どうして出られない!?!」「ご覧なさい、半ちゃんの股座で青大将が狙ってます」。完全なバレ噺ですネ、戦時中の※禁演落語の中の一つです。

「圓師匠の説明」

冒頭にも書きましたが、素人芝居とは言え、演目は「天竺徳兵衛」ですから、必ずこの芝居を観る様に言われました。歌舞伎ですから直ぐに観られる訳でもないのですが、運良く割と早めに、新橋演舞場で観る事が出来ました。師匠曰く「歌舞伎を腹に納めて演る様に、半次は、見栄張でオッチョコチョイで、^{おだ}煽てに乗り易い軽い江戸っ子、準主役の定吉は、13、4歳で明るくオマセで、頓知の利いた憎めない子供で演じる様にと教わりました。半次がお湯屋で緋縮緬の褌を自慢する時は、手拭を口に咥えて尻を捲る仕草をして、両膝立ちをすのですが、これは少し臭く遣る様にと言われましたが、バレ噺を品良く、半次の跳上りをシッカリ演るのは難しいです。この噺を初めて高座に懸けた時に「学校の先生が落語を演ってるみたい」と言われ、落ち込んだ事が在ります…。



「兎雷也」より、ガマに乗る兎雷也

出典：https://rakugonobutai.web.fc2.com/115kawazu_tyaban/kawazu_tyaban.html

十、蛇含草^{じゃがんそう}

これは大阪根多で、三代目の三木助師が得意で演ってた噺です。東京では、餅を蕎麦に代えての「そば清」が有名ですが、この噺は50数年前に問屋組合の敬老会を、深川不動の2階で、三亀松先生をお招きした時に、当時二ツ目だった扇馬師匠が、開口一番で演ったのが初めての出会いです。少々気味の悪い荒唐無稽な噺ですが、枕につかう小咄^{こぼなし}で、落ちがギョっとする様な事を言うのは、本題の緩衝効果を狙っているのですかね!?

「あらずじ」

夏の盛り、燃える様な暑さの中、甚平1枚着た男が、^{うち}隠居の家へフラッと顔を出します。2人で世間話しをしていると、軒先に妙な草がブラ下げて有るので、訊いてみると、^{うわばみ}蟒蛇が人間を丸呑みにして苦しい時に^{たにあい}谷間に下りて行って、あの草を舐めると、腹の中の人間が綺麗に溶けてしまうと言う草だヨと、^{おだ}隠居の説明、男が「エッ！お宅で蟒蛇を飼ってるんですか!?!」と驚くが「馬鹿言っちゃいけないヨ、あれはナ、あの草を下げておくと、悪い虫が入って来ないと言う呪い^{まじな}なんだ」「お呪いですか、じゃあ、あんなに^{たんと}沢山なくても良いんでしょ、あれ半分私^あッしに下さいヨ」と無理にこの草を分けて貰ってフと見ると、この暑いのに火鉢に炭が^お熾きている。訊いてみると、今、^お隠居が田舎から貰った餅を焼いて食べようとしている処だと言う。「私ッし、餅好きですヨ、餅大好き」と、五、六十も有ろうかと言う切餅を「こんなのは朝飯前だ」と大口を叩いて食べ始めるが、途中「只、食べているだけじゃ詰らないから」と餅の食べ方の芸当を見せながら、^{あらかた}粗方食べてしまうが、流石の男も五ツほど残して「もう食べられない、昼飯過ぎ」と白旗を上げたので、^お隠居が呆れて「お帰り、お帰り」と帰すのだが、何しろ口まで餅が詰って

いて、下を向く事が出来ず、鏡を借りて自分の下駄を捜す始末、家へ帰ってはみたが、苦しくて横になる事が出来ず、フと胸を擦る手に触ったのが、隠居の所から貰って来た蛇含草「蟒蛇の胃の薬」、蟒蛇に効くのだから人間に効かない事はなかろうと、これをムシャムシャと食べてしまう。隠居も怒って帰したものの心配になり男の家へ、オカミさんが出て来て「奥の部屋で静かに寝ております」と言うので、隠居が襖をサッと開けると、男の姿はなく、餅が甚平を着て胡座をかいていた。影の声(この草は、人間を溶かす毒草です)

「圓師匠の説明」

書き出しの通り、この噺は、三代目三木助師から付けて貰ったと聞いてます。全体に通じるものはバカバカしさですが、これが中なか難しいのです。圓師匠に「お前は、真面目に考え過ぎるから駄目なんだ！」と強く言われましたが、性分は直らないものですネ、どうしても理屈が先に立ってしまうのです。聴かせ処、見せ処は沢山在りますが、男が隠居の家に来て「お宅は、風通しが良くて涼しいですネ」の場面は、青菜の様に緑の多い広い庭を頭で描いて涼しそうに、又、この噺はどう言う訳ですか？真冬に「噺家の季知らずと申しまして、真夏の暑い盛りに冬の噺を、反対に真冬の極く寒い時期に真夏の噺を致しますが」で始まりますので、お客様に納得して頂く様に持って行けとも教わりました。中場の盛り上げで、餅を食う芸当が観せ場ですが、上手く嵌れば気持ち良く高座を下りられるのですが、これは、稽古で解決するしかない様です。

「落語豆知識」

※「禁演落語」

昭和のはじめは、日華事変から始まり、国民こぞってこの戦に一丸となり、重大時局に対応しなくてはならない時に、戦意を喪失する様な、遊里、酒、妾などの噺は自粛する様にと、53の噺を、昭和16年10月に、浅草本法寺に「はなし塚」を建て、この中に納めたのです。これが禁演落語です。この中には、明烏、居残り佐平次、文違いなどの廓話の名作も数多く含まれています。平和な世が続く事を祈ります。



浅草本法寺「はなし塚」

出典：<https://honpouji.jimdo.com/>